

# ラロ語の音韻体系<sup>1</sup>

王 星月

神戸市外国語大学博士課程

キーワード: ラロ語、彝語、チベット・ビルマ諸語、音韻分析

## 1 はじめに

ラロ語(ISO 639-3 ywt/glottocode:lalo1240)はシナ・チベット語族(Sino-Tibetan)チベット・ビルマ(Tibeto-Burman)語派ロロ・ビルマ(Lolo-Burmese)語支ロロ語群(Loloish)の中部ロロ諸語に属すると考えられる(Bradley 1979,2002)。雲南省大理市の南澗・巍山を中心として、主に大理市の南部・保山市の北部・臨滄市の北部・普洱市の北部などに分布している。具体的には鳳慶・昌寧・永平・景東・漾濞・隆陽・弥渡・禄勳・施甸などに分布している。

陳・辺・李 (1985), Björverud (1998)によれば、ラロの人口は約 50 万人いるとされ、話者人口は約 25 万人である。陳・辺・李 (2009)は、話者人口が 15 万人であると指摘している。一方、Yang (2015)は話者人口を 30 万人以下ではないかと推定している。話者人口は多いように見えるが、UNESCO の世界危機に瀕する言語の調査によれば、ラロ語は脆弱(vulnerable)の言語とみなされている(Moseley 2010)。Bradley (2007)及び Yang (2010)の指摘でも、周辺領域のラロ語は非常に危惧され、消滅に瀕する状況であるとされる。

本稿では雲南省保山市昌寧県の珠街彝族郷黒馬村の二布社(図 1)のラロ語を取り扱う。珠街彝族郷は東経 99°49'~100°02'から北緯 24°59'~25°12'に位置し、昌寧県の北東部に

あり、北西部は大理州の巍山県・永平県・漾濞県と接する。南は臨滄市の鳳慶県と繋がり、西は昌寧県の苟街彝族・ミャオ族の集落と隣接している。

珠街彝族郷の面積は 281 平方キロメートルである。9 つの村が存在し、133 のグループ、4,642 の世帯、14,176 人が暮らしている。村にはイ族、ミャオ族、リス族などの少数民族が 13,185<sup>2</sup>人住んでおり、総人口の 93%を占める。このうち、12,465

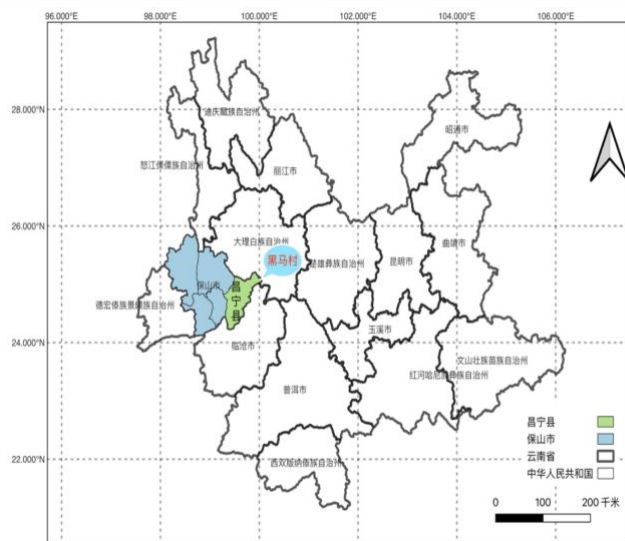


図 1 黒馬村の位置

<sup>1</sup> 本稿は筆者の修士論文の補筆・改訂版である。

<sup>2</sup> 珠街彝族郷人口の各種参考資料は以下の通りである。

人がイ族で、総人口の 87.93%を占めている。その内、黒馬村には 420 戸がある。村の総人口は 1,640 人 (2022 年)で、ラロ語を母語として使用している。

## 1.1 ラロ語の方言

陳・辺・李(1985)によれば、ラロ語の方言は二種類に分かれる。東山方言と西山方言である。巍山を境界として、巍山の東が東山方言、巍山の西が西山方言である。しかしながら、このような地理的な特徴のみに従った分類には限界があり、東西方言の分類は巍山を超えると適用が難しい部分も存在する。また、東西方言における音声や音韻などの相互の差異に関する問題はこれまで詳細に論じられてはこなかった。

Yang (2015 図 2)は音韻・音声・地理の特徴に基づき、ラロ語内部の方言を分類した。主方言は中部方言(C)・西部方言(W)・東部方言(E)、南東部(SE)の四つ及び少数話者の Eka(俄卡)・XZ(徐掌)・YL(楊柳)・MD(芒底)の四つに分類される。Yang の分類に従えば、昌寧県のラロ語は中部方言に属すると考えられる。

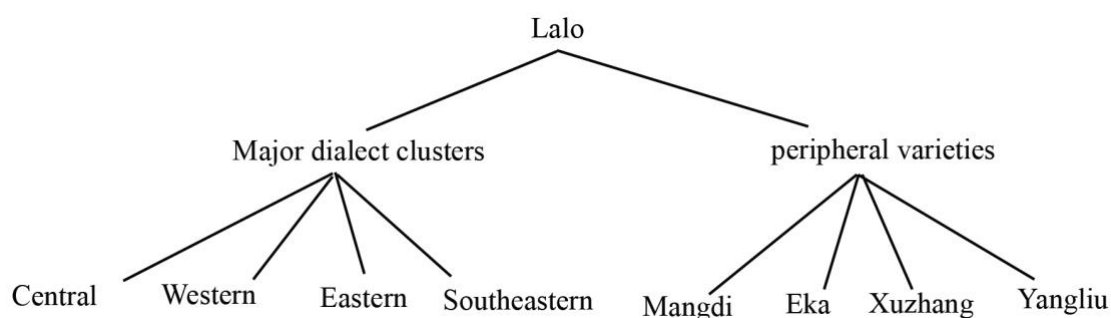


図 2 ラロ語の方言 (Yang2015 [筆者改訂])

## 1.2 先行研究

ラロ語に関する言語研究は 20 世紀初頭まで遡る。詳細な調査・分析は 1990 年代以降である。ラロ語内部の方言的差異の分析・比較研究・歴史言語学的な研究 Yang の研究にのみ見られる。Yang の研究は主に音声・音韻・変調・音変化の方面から進められている。形態・統語などの問題は触れられていない。ラロ語に関する研究は全てを挙げるのは限界があるため、主な研究を以下に掲げる。

YNYF(雲南彝語方言語彙集 1984)、陳・辺・李(1985)、孫・胡・黄(2007)、黄(1992)、王(2003)、朱(2005)などの多くの研究者は少なくともラロ語の音韻体系について概

---

雲南省昌寧県志編纂委員会(1985)によれば、珠街郷人口は 13,794 人、彝族がそのうちの 87.6%を占める。保山市民族宗教事務局(2006)によれば、珠街郷人口は 14,969 人、彝族・ミャオ族・リス族が 14,066 人である。李永周(2016):珠街郷彝族の人口は 12,474(2015)人、珠街郷総人口の 88.1%を占める。雲南省昌寧県珠街郷人民政府 (<http://www.yncn.gov.cn/info/3993/49918.htm>): 12,465 人がイ族で、総人口の 87.93%を占める。

黒馬村の人口は年末統計表による(黒馬村の村長私信)。

説を発表した。また一部の研究者は巍山県のラロ語の語彙も発表した。これら調査研究はおよそ巍山県を中心に進められてきた。周辺地域のラロ語は調査されていないところが多く見られる。巍山県はラロ語を中心に使用している地域に間違いはないが、それ以外の地域で話されるラロ語はよりいっそう調査すべきである。

文法に関しては、Björverud(1998)は音声・音韻だけではなく、形態・統語といった文法特徴を記述してきた。現在に至るまで広く参照されている。周(2017)の博士論文はラロ語の参照文法であるが、依然として未公開である。ト(2018, 2020, 2022)生成文法の立場から巍山県のラロ語の等価構文(equative construction)、数量詞遊離(floating numeral quantifier)及びラロ語の驚嘆性(mirativity)と証拠性範疇(evidentiality)の問題を論じてきた。

これらの先行研究に関わる調査はおよそ巍山県を中心に進められてきた。それ以外は臨滄市の芒底・俄卡及び保山市隆陽区の陽柳・徐掌などの地域のラロ語についても音韻的な特徴に関する報告がある。保山市の昌寧県や臨滄市の北部の地域の調査報告は僅かで、未調査と言っても過言ではないだろう。

### 1.3 データの収集・分析方法

非常に残念だが、2019年末から世界中で流行しているコロナ禍の影響がフィールド調査に大きな影響を与えている。筆者は修士課程の間、現地調査を行えなかった。そのため、音声データは事前に協力者にPCM録音機を送付して、録音してもらった形を採用した<sup>3</sup>。1200個程度の基礎語彙・短文・小学3年生用の国語教科書の文章(ラロ語に翻訳してもらったもの)を録音した。短文は簡単な陳述表現、一般的な否定表現、疑問文表現といった文法表現を含んでいる。

2023年に入ってからようやくフィールド調査が可能となった。2023年1月10日に現地調査へ行った。以前収集されたデータのチェック及び新たなデータの収集を実施した。そして、収集した音声データは音声分析ソフトウェアPraatを用いて、分節音と声調などの音声の特徴を観察した。

また、Björverud・Yangらが調査したものと、本研究で扱う黒馬村は調査時期や対象地域も大きく異なるため、音韻分析の結果は異なるを考える。そのため、必要がない限り、Björverud(1998)・Yang(2010/2015)のデータと分析に言及せず、筆者のデータのみについて分析・解釈を提示していくことにする。なお、記号の書記法は国際音声記号(IPA)を用いて、必要に応じて補助記号を追加して示す。

---

<sup>3</sup> 2019年から2022年において、すべての音声データはリモート調査の形で採集した。具体的に、協力者に基礎語彙表を送って、語彙表にある語彙を録音してもらった。録音する際には、漢語の読み方一回にして、対応するラロ語の読み方は3回発音して録音した。

基礎語彙は1981年に中国の方言研究室資料室を出した『方言調査語彙表』からの参照である。

## 1.4 本稿の構成

本論文はラロ語の音韻にまつわる共時的記述を行う。以下ではそれぞれの節の概要について紹介する。

第1節はラロ語の使用状況・現在に至るまでの先行研究をまとめる。ラロ語は大理市の南澗・巍山を中心として使用され、話者数は30万人以下である。主要方言は四つ(中部・西部・東部・東南部)存在し、全て中部ロロ諸語に位置付けられる。

第2節はラロ語の音節構造をまとめる。ラロ語の音節構造は (C1)V(C2)/T(Cは子音、Vは母音、Tは声調)である。

第3節は子音体系をまとめる。子音音素は全部で33種類ある。時に、鼻音は成節子音としても現れる。末子音C2は -n 及び -ŋ の二種類がある。表1で提示した全ての子音は頭子音として出現できる。頭子音は閉鎖音・鼻音・破擦音・摩擦音・接近音の五つの調音方法に分かれる。

第4節は母音体系を記述していく。ラロ語の母音は緊喉母音と非緊喉母音の2種類が対立している。二重母音や三重母音などは基本的に漢語からの借用語である。

第5節では声調体系をまとめる。ラロ語の基本声調は高平調(55)、中平調(33)、低下降調(21)の三つがある。声調交替の現象も見られる。

最後に結論をまとめる。本論では主に珠街のラロ語の音韻現象について共時における特徴を取り上げた。ラロ語の子音は有声無気音・無声無気音・無声有気音を区別し、母音は緊喉母音と非緊喉母音の対立がある。固有語では単母音が中心である。二重母音などは基本的に借用語にのみ現れる。基本声調は高平調(55)、中平調(33)、低下降調(21)である。時に声調交替も見られる。

## 2 音節構造

ラロ語は音節声調型の言語である。音節は子音・母音・声調の三つの要素に分けられる。音節構造は下記(1)の通りである。

(1) 音節構造=(C1)V(C2)/T(Cは子音、Vは母音、Tは声調)

(1) に示した音節構造の各要素の概略を述べると以下のようなになる。

1.子音:子音は頭子音(C1)・末子音(C2)の位置で現れる。/n/は成節子音としても現れるが、生起条件は限られている(詳細は3.3節に)。末子音C2は-n及び-ŋの二種類がある(第2節)。

2.母音:固有語では単母音が中心である。漢語からの借用語で二重母音あるいは三重母音を観察することがあるが、極めて限定的な語彙にのみ出現する(第3節)。

3.声調:声調は超分節音的な特徴を表す(第4節)。

しかし、音節構造は必ずしも(1)の通りに実現するわけではない。漢語からの借用語で異なる音節構造になる可能性があり得る。以下に各音節タイプの実例を示しておく。

- (1): V/T /a<sup>21</sup>/[ʔ<sup>21</sup>] 「魚」 /i<sup>33</sup>/[i<sup>33</sup>] 「4」  
 (2): C/T /ŋ<sup>21</sup>du<sup>33</sup>/[ŋ<sup>21</sup>du<sup>33</sup>] 「空」 /ŋ<sup>55</sup>/[ŋ<sup>55</sup>] 「キノコ」  
 (3): CV/T /ya<sup>55</sup>/[ya<sup>55</sup>] 「水」 /ʂi<sup>21</sup>/[ʂi<sup>21</sup>] 「歪む」  
 (4): CVC/T /faŋ<sup>33</sup>/[fəŋ<sup>33</sup>] 「四角い」 <CH.fāng  
 (5): CVV/T /phia<sup>33</sup>tei<sup>21</sup>/[p<sup>h</sup>ie<sup>33</sup>tei<sup>21</sup>] 「ミス」  
 (6): CVVV/T /liu<sup>21</sup>kuai<sup>21</sup>tʂi<sup>33</sup>/[liu<sup>21</sup>kuai<sup>21</sup>tʂi<sup>33</sup>] 「肘」 <CH.guǎi

### 3 子音体系

表 1: ラロ語の子音音素一覧表

調音点 調音方法		両唇音	唇歯音	歯茎音	そり舌音	歯茎 硬口音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	無気	p b		t d			k g	
	有気	ph		th			kh	
鼻音		m		n			ŋ	
破擦音	無気			ts dz	tʂ dʒ	tɕ dʑ		
	有気			tsh	tʂh	tɕh		
摩擦音			f v	s z	ʂ ʒ	ɕ ʑ	x ɣ	h
接近音		(w)		l				

ラロ語の子音音素は表 1 の通りである。子音音素は全部で 33 ある。音節構造によって、分かれた頭子音及び末子音のそれぞれの音声特徴を具体的な実例を挙げながら述べていく。

#### 3.1 頭子音

表 1 で提示した全ての子音が頭子音として現れうる。頭子音は閉鎖音・鼻音・破擦音・摩擦音・接近音の五つの調音方法に分かれる。各子音の音価は以下の通りである。

##### [子音音素の特徴]

###### 閉鎖音

閉鎖音は全て 9 種類あり、/p/[p], /ph/[p<sup>h</sup>], /b/[b], /t/[t], /th/[t<sup>h</sup>], /d/[d], /k/[k], /kh/[k<sup>h</sup>], /g/[g]である。調音点は両唇・歯茎・軟口蓋になる。有声無気音・無声無気音・無声有気音の 3 種類において対立する。

## 鼻音

鼻音は/m/[m], /n/→[ŋ]/\_i, [n]/elsewhere, /ŋ/[ŋ]/\_ [+back]の3種類である。鼻音は成節鼻音としても生起できる。なお、音節間の同化現象により、成節鼻音は3.3節で後述するように、直後の頭子音の影響を受けて逆行同化(regressive assimilation)を起こす。

## 破擦音

破擦音は/ts/[ts], /tsh/[tʰ], /dz/[dz], /tʃ/[tʃ], /tʃh/[tʃʰ], /dʒ/[dʒ], /tɕ/[tɕ], /tɕh/[tɕʰ], /dʒ/[dʒ]の9種類ある。破擦音は閉鎖音と同様、有聲無気音・無声無気音・無声有気音において対立がある。また、調音点は歯茎・そり舌・歯茎硬口蓋に分かれる。しかし、歯茎硬口蓋音と結合する母音には限りがある。具体的に、母音/i, y, e, a/などの母音と共起しうる。言い換えれば、歯茎硬口蓋音は後舌母音と共起しない。

## 摩擦音

摩擦音は豊富であり、全部で11種ある。

/f/[f], /v/[v], /s/[s], /z/[z], /ʃ/[ʃ], /ʒ/[ʒ], /ɕ/[ɕ], /ʒ/[j~z], /x/[x], /ɣ/[ɣ], /h/[h]。

摩擦音は声門音/h/を除き、有聲音・無聲音の2種類が認められる。調音点としては唇歯音・歯茎音・そり舌音・歯茎硬口蓋音・軟口蓋音・声門音に分けられる。

/z/は/i/の前に置かれるとかなり弱く、[j~j]のようにしか聞こえない。/ɣ/は前舌母音と結合しない。/x/と/h/は母音/e, a, o/の前で対立している。

/k/は母音/-y/が後続する場合には、硬口蓋化が起こり、音声的には[k]として実現する。/ɕ/の直後の母音は/-a/または/-e/である場合にも硬口蓋化が起こり、音声的には[ɕ]として実現する。/h/の直後の母音は鼻音化される。

## 接近音

接近音は2種類ある。両唇軟口蓋接近音として/w/を、側面接近音として/l/を認める。/w/は[w]として実現するが、漢語からの借用語にのみ出現する。/l/[l]は全ての母音と共起しうる。

以下に各頭子音について具体的な例を掲げる。

### [閉鎖音]

/p/: /pi<sup>21</sup>/[pi<sup>21</sup>]「太い」、/pə<sup>21</sup>/[pə<sup>21</sup>]「梳く」、/pa<sup>21</sup>/[pə<sup>21</sup>]「人」

/ph/: /phi<sup>21</sup>/[pʰi<sup>21</sup>]「吐く」、/phə<sup>33</sup>/[pʰə<sup>33</sup>]「腐敗する」、/pha<sup>21</sup>/[pʰə<sup>21</sup>]「優美」

/b/: /o<sup>55</sup>bi<sup>21</sup>/[o<sup>55</sup>bi<sup>21</sup>]「蚊」、/bə<sup>21</sup>/[bə<sup>21</sup>]「薄い」、/ba<sup>21</sup>/[be<sup>21</sup>]「蜂蜜」

/t/: /tə<sup>33</sup>/[tə<sup>33</sup>]「粗い」、/tu<sup>55</sup>/[tu<sup>55</sup>]「沸かす」、/ta<sup>21</sup>/[tə<sup>21</sup>]「切る」

/th/: /thə<sup>21</sup>/[tʰə<sup>21</sup>]「側」、/thu<sup>55</sup>/[tʰu<sup>55</sup>]「厚い」、/a<sup>55</sup>tha<sup>21</sup>/[tʰə<sup>55</sup>tʰə<sup>21</sup>]「刀」

/d/: /ɕy<sup>55</sup>də<sup>55</sup>/[ɕy<sup>55</sup>də<sup>55</sup>]「鉄」、/khu<sup>55</sup>du<sup>55</sup>/[kʰu<sup>55</sup>du<sup>55</sup>]「穴」、/da<sup>21</sup>nan<sup>21</sup>/[dɛ<sup>21</sup>nən<sup>21</sup>]「弓」

/k/: /ku<sup>33</sup>/[ku<sup>33</sup>] 「9」、/kə<sup>55</sup>/[kə<sup>55</sup>] 「胆」、/a<sup>33</sup>fu<sup>55</sup>ky<sup>21</sup>/[ɸ<sup>33</sup>fɸ<sup>55</sup>kj<sup>21</sup>] 「白」  
 /kh/: /khu<sup>21</sup>/[k<sup>h</sup>u<sup>21</sup>] 「盗む」、/khə<sup>55</sup>/[k<sup>h</sup>ə<sup>55</sup>] 「個」、/khy<sup>33</sup>ei<sup>55</sup>/[k<sup>h</sup>y<sup>33</sup>ei<sup>55</sup>] 「裏」  
 /g/: /gu<sup>33</sup>tʃhi<sup>55</sup>/[gu<sup>33</sup>tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>55</sup>] 「体」、/gə<sup>55</sup>go<sup>33</sup>/[gə<sup>55</sup>go<sup>33</sup>] 「皮」、/ɸə<sup>33</sup>gy<sup>33</sup>/[ɸə<sup>33</sup>gy<sup>33</sup>] 「こら」

### [鼻音]

/m/: /a<sup>55</sup>mu<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>mu<sup>21</sup>] 「馬」、/ma<sup>21</sup>/[mə<sup>21</sup>] 「否定」、/me<sup>55</sup>/[me<sup>55</sup>] 「布」  
 /n/: /nu<sup>21</sup>/[nu<sup>21</sup>] 「柔らかい」、/na<sup>21</sup>/[nə<sup>21</sup>] 「止まる」、/ne<sup>33</sup>/[ne<sup>33</sup>] 「近い」  
 /ŋ/: /a<sup>55</sup>ŋo<sup>55</sup>/[ɸ<sup>55</sup>ŋo<sup>55</sup>] 「ガチヨウ」、/ŋa<sup>55</sup>/[ŋə<sup>55</sup>] 「私」、/ŋe<sup>21</sup>/[ŋe<sup>21</sup>] 「早い」

### [破擦音]

/ts/: /tsi<sup>21</sup>/[tsɿ<sup>21</sup>] 「咳をする」、/si<sup>21</sup>tse<sup>55</sup>/[sɿ<sup>21</sup>tse<sup>55</sup>] 「肝臓」、/tsə<sup>33</sup>/[tsə<sup>33</sup>] 「達」  
 /tsh/: /tshi<sup>21</sup>fu<sup>21</sup>/[tsh<sup>ɿ</sup>ɿ<sup>21</sup>fɸ<sup>21</sup>] 「肺」、/tshə<sup>55</sup>/[tshə<sup>55</sup>] 「油」、/tshə<sup>33</sup>/[tshə<sup>33</sup>] 「熱い」  
 /dz/: /sɿ<sup>33</sup>dzi<sup>55</sup>/[sɿ<sup>44</sup>dzi<sup>55</sup>] 「森」、/dze<sup>21</sup>/[dze<sup>21</sup>] 「騎乗する」、/dzə<sup>21</sup>/[dzə<sup>21</sup>] 「食べる」  
 /tʃ/: /khu<sup>55</sup>tʃi<sup>21</sup>/[k<sup>h</sup>u<sup>55</sup>tʃɿ<sup>21</sup>] 「山」、/a<sup>55</sup>tʃa<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>tʃə<sup>21</sup>] 「雀」、/tʃu<sup>33</sup>/[tʃu<sup>33</sup>] 「教える」  
 /tʃh/: /a<sup>55</sup>tʃhi<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>21</sup>] 「羊」、/a<sup>55</sup>tʃha<sup>55</sup>/[ɸ<sup>55</sup>tʃ<sup>h</sup>ə<sup>55</sup>] 「フライパン」、/tʃhu<sup>55</sup>/[tʃ<sup>h</sup>u<sup>55</sup>] 「人」  
 /dz/: /dzi<sup>55</sup>/[dzi<sup>55</sup>] 「酒」、/vu<sup>33</sup>dza<sup>33</sup>/[vɸ<sup>33</sup>dzə<sup>33</sup>] 「夫」、/dzu<sup>33</sup>/[dzu<sup>33</sup>] 「ある」  
 /te/: /tei<sup>33</sup>/[tei<sup>33</sup>] 「抓る」、/a<sup>55</sup>tey<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>tey<sup>21</sup>] 「とげ」、/tei<sup>55</sup>/[tei<sup>55</sup>] 「酸っぱい」  
 /teh/: /tehi<sup>55</sup>/[te<sup>h</sup>ɿ<sup>55</sup>] 「水稻」、/tehy<sup>55</sup>/[te<sup>h</sup>y<sup>55</sup>] 「毛」、/tehi<sup>55</sup>/[te<sup>h</sup>ɿ<sup>55</sup>] 「屎」  
 /dz/: /dzi<sup>21</sup>ti<sup>21</sup>/[dzi<sup>21</sup>ti<sup>21</sup>] 「嬉しい」、/dzi<sup>21</sup>phi<sup>21</sup>/[dzi<sup>21</sup>p<sup>h</sup>ɿ<sup>21</sup>] 「お金/質量単位」

### [摩擦音]

/f/: /fu<sup>33</sup>/[fɸ<sup>33</sup>] 「卵」、/fe<sup>21</sup>/[fe<sup>21</sup>] 「干す」、/fi<sup>21</sup>tʃhi<sup>33</sup>/[fi<sup>21</sup>tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>33</sup>] 「ケチ」  
 /v/: /vu<sup>33</sup>zi<sup>21</sup>/[vɸ<sup>33</sup>zi<sup>21</sup>] 「生」、/[ve<sup>21</sup>]/[vei<sup>21</sup>] 「瓦」、/vi<sup>55</sup>/[vi<sup>55</sup>] 「濃」  
 /s/: /si<sup>21</sup>/[sɿ<sup>21</sup>] 「血」、/sə<sup>33</sup>/[sə<sup>33</sup>] 「三」、/se<sup>21</sup>/[se<sup>21</sup>] 「好き」  
 /z/: /zi<sup>33</sup>/[zi<sup>33</sup>] 「大麦」、/zi<sup>55</sup>me<sup>21</sup>/[zi<sup>55</sup>me<sup>21</sup>] 「多い」、/ze<sup>21</sup>me<sup>21</sup>/[ze<sup>21</sup>me<sup>21</sup>] 「娘」  
 /ʃ/: /ʃi<sup>55</sup>/[ʃɿ<sup>55</sup>] 「長い」、/ʃo<sup>21</sup>/[ʃo<sup>21</sup>] 「負ける」、/a<sup>55</sup>ʃu<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>ʃu<sup>21</sup>] 「キジ」  
 /z/: /zi<sup>21</sup>tehi<sup>33</sup>/[zi<sup>21</sup>te<sup>h</sup>ɿ<sup>33</sup>] 「怒る」、/zə<sup>55</sup>ei<sup>55</sup>/[zə<sup>55</sup>ei<sup>55</sup>] 「右」、/a<sup>55</sup>zə<sup>55</sup>/[ɸ<sup>55</sup>zə<sup>55</sup>] 「綿羊」  
 /e/: /ey<sup>21</sup>/[ey<sup>21</sup>] 「歩く」、/ei<sup>21</sup>/[ei<sup>21</sup>] 「殺す」、/ea<sup>21</sup>na<sup>21</sup>/[e<sup>h</sup>ə<sup>21</sup>ne<sup>21</sup>] 「とても、すごく」  
 /z/: /a<sup>55</sup>zy<sup>21</sup>/[ɸ<sup>55</sup>zy<sup>21</sup>] 「針」、/u<sup>33</sup>zi<sup>21</sup>/[u<sup>33</sup>zi<sup>21</sup>] 「古い」、/za<sup>21</sup>/[zə<sup>21</sup>] 「抜く」  
 /x/: /xo<sup>21</sup>pe<sup>21</sup>/[xo<sup>21</sup>pe<sup>21</sup>] 「肌」、/xa<sup>21</sup>/[xa<sup>21</sup>] 「肉」、/xe<sup>21</sup>/[xe<sup>21</sup>] 「住む」  
 /ɸ/: /ɸə<sup>33</sup>/[ɸə<sup>33</sup>] 「汗」、/ɸa<sup>21</sup>/[ɸə<sup>21</sup>] 「力」、/a<sup>33</sup>ɸə<sup>21</sup>/[ɸ<sup>33</sup>ɸə<sup>21</sup>] 「影」  
 /h/: /ho<sup>33</sup>/[hə<sup>33</sup>] 「養う」、/ha<sup>55</sup>/[hə<sup>55</sup>] 「靈魂」、/ni<sup>33</sup>he<sup>55</sup>/[ni<sup>33</sup>hə<sup>55</sup>] 「寺」

### [接近音]

/l/: /li<sup>55</sup>/[li<sup>55</sup>] 「来る」、/lu<sup>55</sup>/[lu<sup>55</sup>] 炒める、/ly<sup>21</sup>/[ly<sup>21</sup>] 「浴びる」  
 /w/: /wai<sup>55</sup>ti<sup>55</sup>/[wei<sup>55</sup>ti<sup>55</sup>] 「地元」 < CH.wàidì、/wai<sup>55</sup>ko<sup>33</sup>/[wei<sup>55</sup>kə<sup>33</sup>] 「外国」 < CH.wàiguó

## 3.2 末子音

ラロ語の末子音 C2 は-n 及び-ŋ の二種類が入りうる。いずれも漢語からの借用語にのみ現れる。

/-n/: 音声実現としては[-n]である。母音-i-, -e-, -a-, -ia-, -u-と結合する。

/-ŋ/: 音声実現としては[-ŋ]である。母音-i-, -e-, -a-, -o-と結合する。

/-n/と/-ŋ/それぞれについて母音との結合例を以下で掲げる。

**/-n/**

/-in/: /tɕhin<sup>55</sup>tɕhi<sup>53</sup>/[tɕ<sup>h</sup>in<sup>55</sup>tɕ<sup>h</sup>i<sup>53</sup>] 「親戚」 <CH.qīnqi

/-en/: /na<sup>33</sup>ʂen<sup>33</sup>/[nɤ<sup>33</sup>ʂen<sup>33</sup>] 「叔母さん」 <CH.shěn,

/ken<sup>21</sup>tɕi<sup>33</sup>/[ken<sup>21</sup>tɕi<sup>33</sup>] 「堰」 <CH.gěngzi

/-an/: /pan<sup>33</sup>tɕi<sup>33</sup>/[pən<sup>33</sup>tɕi<sup>33</sup>] 「板」 <CH.bǎnzi、/kan<sup>21</sup>tɕi<sup>33</sup>/[kən<sup>21</sup>tɕi<sup>33</sup>] 「茎」 <CH.gānzi

/-ian/: /ian<sup>55</sup>/[iən<sup>55</sup>] 「タバコ」 <CH.yān、/pian<sup>21</sup>/[piən<sup>21</sup>] 「平坦」 <CH.biǎn

/-un/: /tɕie<sup>33</sup>xun<sup>33</sup>/[tɕie<sup>33</sup>xun<sup>33</sup>] 「結婚する」 <CH.jiéhūn

**/-ŋ/**

/-iŋ/: /tiŋ<sup>33</sup>pha<sup>33</sup>/[tiŋ<sup>33</sup>p<sup>h</sup>ɤ<sup>33</sup>] 「くまで」 <CH.dīngpá

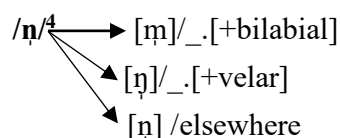
/-eŋ/: /tʂheŋ<sup>33</sup>ku<sup>55</sup>pa<sup>21</sup>/[tʂ<sup>h</sup>eŋ<sup>33</sup>ku<sup>55</sup>pɛ<sup>21</sup>] 「都会の人」 <CH.chéng

/-aŋ/: /ʂaŋ<sup>33</sup>tɕi<sup>33</sup>/[ʂeŋ<sup>33</sup>tɕi<sup>33</sup>] 「怪我する」 <CH.shāng

/-oŋ/: /tʂhoŋ<sup>55</sup>ɛy<sup>55</sup>/[tʂ<sup>h</sup>oŋ<sup>55</sup>ɛy<sup>55</sup>] 「セロリ」、/toŋ<sup>33</sup>ei<sup>33</sup>/[toŋ<sup>33</sup>ei<sup>33</sup>] 「物」 <CH.dōngxi

### 3.3 成節鼻音(syllabic nasal)

2.1 節で述べた通り、鼻音は成節鼻音になることがある。成節鼻音は直後の音節の頭子音の調音点に応じて逆行同化 (regressive assimilation)する。具体的に分布する環境は以下の通りとなる。



成節鼻音の直後が両唇音となる場合、音声的には両唇鼻音[m]として実現し、軟口蓋子音の直前に現れると軟口蓋鼻音[ŋ]として実現する。それ以外では[ŋ]で実現する。すなわち、歯茎音の直前だけではなく、音節末に出現する時も[ŋ]として実現する。

以下にそれぞれの例を示しておく。

<sup>4</sup> ここでの/n/という表記は音素として/n/と別個に存在することを意味していない。あくまで成節鼻音の/n/の環境の記述を行うためにこの表記を用いていることに注意されたい。



[m]: /ŋ<sup>21</sup>pe<sup>33</sup>/[m<sup>21</sup>pe<sup>33</sup>] 「墓」、/ŋ<sup>33</sup>ma<sup>33</sup>/[m<sup>33</sup>me<sup>33</sup>] 「心臓」、/ŋ<sup>21</sup>be<sup>55</sup>/[m<sup>21</sup>be<sup>55</sup>] 「柿」  
 [ŋ]: /ŋ<sup>55</sup>ts<sup>h</sup>i<sup>21</sup>/[ŋ<sup>55</sup>ts<sup>h</sup>i<sup>21</sup>] 「泥」、/ŋ<sup>33</sup>du<sup>33</sup>/[ŋ<sup>33</sup>du<sup>33</sup>] 「空」、/ŋ<sup>21</sup>tsi<sup>33</sup>/[ŋ<sup>21</sup>tsi<sup>33</sup>] 「汚い」  
 /a<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>] 「牛」、/vu<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>/[vy<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>] 「水牛」、/tchi<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>/[te<sup>h</sup>i<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>] 「糯米」  
 [ŋ]: /ŋ<sup>33</sup>ku<sup>33</sup>/[ŋ<sup>33</sup>ku<sup>33</sup>] 「雷」、/ŋ<sup>21</sup>khu<sup>21</sup>/[ŋ<sup>21</sup>k<sup>h</sup>u<sup>21</sup>] 「煙」、/ŋ<sup>33</sup>xə<sup>33</sup>pə<sup>33</sup>/[ŋ<sup>33</sup>xə<sup>33</sup>pə<sup>33</sup>] 「二ヶ月」  
 合成語: /a<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>ma<sup>21</sup>ku<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>m<sup>21</sup>me<sup>21</sup>ku<sup>21</sup>] 「雌牛」、/a<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>tchi<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>te<sup>h</sup>i<sup>21</sup>] 「牛糞」  
 /a<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>he<sup>21</sup>mie<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>ŋ<sup>21</sup>hē<sup>21</sup>mie<sup>21</sup>] 「牛の胃」

上の例に見えるように、成節鼻音はわずかな例ながら、語頭・語中・語末にかかわらず現れている。

また、語彙として独立した形式と合成語になった形式において、成節鼻音の音声実現に異なる場合がある。ただし、その場合も意味上の区別を持たない。例えば、単独の「牛」において鼻音[ŋ]と発音され、合成語においては、[ŋ]の直後の初頭子音の調音位置に合わせて同化を行う。/ŋ/は[m]または[ŋ]と発音する。しかし、意味を区別しない。

## 4 母音体系

ラロ語の母音は緊喉母音<sup>5</sup>と非緊喉母音の2種類が対立している。表2は単母音音素の一覧表である。

<sup>5</sup> 緊喉母音に関する先行研究は以下のようにまとめられる。

「緊喉母音」の現象については馬(1948)を嚆矢とする。馬(1948: 579)は雲南省禄勸県安多康村彝語の母音に緊喉母音と非緊喉母音の対立があると初めて言及した。馬の研究によれば、緊喉母音を発声する際、「喉頭がやや緊縮(Laryngeal Constriction)する」と記述している。

戴(1958: 36)は、緊喉母音を「声帯を緊張させ縮める音」と定義し、「場合によって喉頭と声帯が緊張し縮まるだけでなく、咽頭や口腔内の筋肉も同時に引き締まる」とする。さらに、戴(1991: 1)によれば、緊喉母音の発音上の特徴は「喉頭の筋肉を緊縮し、その音色が比較的大きくなる。」喉頭の筋肉を緊縮しないものが非緊喉母音である。

表記方法: 中国において一般的に緊喉母音は“\_”で示すことが多いが、本論文では補助記号“~”を示すことにする。

なお、緊喉母音の英訳は Creaky Vowel である。研究者によって「咽頭化(Pharyngealization)」あるいは「喉頭化(Laryngealization)」の現象が見られるとする場合もある。例えば、岩佐(2019)は、アシ・イ語の緊喉母音は軟口蓋化、または咽頭化(Pharyngealization)する可能性が高く、ノス・イ語の緊喉母音は喉頭化(Laryngealization)する可能性が高いと結論づけている。本論文では咽頭化などの現象についてはこれ以上踏み込まないこととする。

表 2: 単母音音素一覧表

非緊喉母音			緊喉母音		
i, y		u	i		u
e	ə	o	ɛ	ɚ	ɔ
	a			a	

## 4.1 単母音

### 4.1.1 非緊喉母音

単母音は前舌母音、中舌母音と後舌母音の三種のグループに分かれる。

前舌母音 /i/→[ɪ]/{ts, tsh, dz, s, z}\_; [ɪ]/{tɕ, tɕh, dzɕ, zɕ}\_; [i]/elsewhere; /e/→[ei~ɛ]

中舌母音 /a/→[a]/{x, h}\_; [ɐ]/elsewhere

後舌母音 /u/→[ʏ]/{f, v}\_; [u]/elsewhere; /o/→[o~ɔ]

以下、注意点を述べる。

/i/は無声そり舌音の直後に置かれる場合は無声化されることがある。音声実現は[ɪ]となる。/e/は多くは[e]で発音されることが多いが、時によって[ei]になることがある。

/u/は多くは[u]で発音される。ただし、/f/また/v/と結合すると唇歯音化され、[ʏ]で発音される。/o/は多くは[o]で発音される。しかし、二重母音/ao/また三重母音/iao/で現れる際に音声実現は[ɐo]また[iɐo]で発音されることが多い。

また、母音が絶対語頭に現れる場合、音声的には若干に声門閉鎖音[ʔ]を伴うことがある。しかし、声門閉鎖音[ʔ]は音韻的な意味を持たない。全ての母音は/h/の直後に出現すると鼻音化<sup>6</sup>される。

それでは以下に、前舌母音・中舌母音・後舌母音のそれぞれの実例を見ていく。

#### [前舌母音]

/i/ 非円唇前舌尖母音[ɪ]/{ts, tsh, dz, s, z}\_; 非円唇前舌尖そり舌母音

[ɪ]/{tɕ, tɕh, dzɕ, zɕ}\_; 前舌非円唇母音[i]/elsewhere; 結合する頭子音によって、3種類の異音が実現する。

/si<sup>21</sup>/[sɪ<sup>21</sup>]「血」、/zi<sup>33</sup>/[zɪ<sup>33</sup>]「大麦」、/tɕhi<sup>33</sup>/[tɕhɪ<sup>33</sup>]「一」、/dzi<sup>55</sup>/[dzɪ<sup>55</sup>]「酒」

/ɲ<sup>33</sup>tsi<sup>33</sup>/[ɲ<sup>33</sup>tsɪ<sup>33</sup>]「汚い」、/mi<sup>33</sup>se<sup>33</sup>/[mi<sup>33</sup>sei<sup>33</sup>]「目」、/xi<sup>55</sup>/[xi<sup>55</sup>]「建物」

/y/ /tehy<sup>55</sup>/[tehy<sup>55</sup>]「毛」、/ny<sup>21</sup>/[ny<sup>21</sup>]「嗅ぐ」、/ey<sup>21</sup>/[ey<sup>21</sup>]「歩く」

<sup>6</sup> Matisoff (1975: 265-287)は喉頭音(laryngeal)の[h]または[ʔ]に後続する母音は鼻音化される可能性があるとして指摘している(rhinoglottophilia)。例えば、ラフ語・リス語(中部ロロ諸語)の母音は無頭子音また/h-/に後続すると鼻音化される。Yang (2015: 37)によると、その現象は声門音/h/を区別するラロ語の方言にも当てはまる。

/e/ /e/の音声実現には、非円唇前舌半狭母音と非円唇前舌高母音からなる二重母音[ei]~非円唇前舌半狭母音[e̞];大多数の語彙で[ei]と発音されるが、一部の語彙[e̞]と発音されるものもある。[ei]のかわりに[e̞]と発音しても理解される。  
/le<sup>55</sup>/[lɛ<sup>55</sup>]「舌」、/de<sup>21</sup>/[dei<sup>21</sup>]「織る」、/na<sup>21</sup>phe<sup>21</sup>/[nɛ<sup>21</sup>p<sup>h</sup>ei<sup>21</sup>]「尻尾」

#### [中舌母音]

/ə/ /pə<sup>21</sup>/[pə<sup>21</sup>]「梳く」、/yə<sup>55</sup>/[yə<sup>55</sup>]「水」、/nə<sup>55</sup>/[nə<sup>55</sup>]「2SG」  
/a/ /a/の音声実現としては、中舌非円唇広母音[ɐ]~後舌非円唇広母音[ɑ]の異音が確認される。多くは[ɐ]で音声的に実現するが、無声軟口蓋摩擦音/x/と無声声門摩擦音/h/と結合すると[ɑ]として実現する。  
/xa<sup>21</sup>/[xɑ<sup>21</sup>]「肉」、/a<sup>55</sup>ha<sup>33</sup>/[ɐ<sup>55</sup>hɑ<sup>33</sup>]「ネズミ」、/ta<sup>55</sup>ta<sup>33</sup>/[tɐ<sup>55</sup>tɑ<sup>33</sup>]「伯父さん」

#### [後舌母音]

/u/ /fu<sup>33</sup>/[fɯ<sup>33</sup>]「卵」、/tʂhu<sup>33</sup>/[tʂɯ<sup>33</sup>]「生姜」、/thu<sup>21</sup>dzi<sup>55</sup>/[tʰu<sup>21</sup>dʒɯ<sup>55</sup>]「松」  
/o/ 音声的に多くの場合[o]として実現されるが、一部の語彙では[ɔ]と発音されることがある。それゆえに後舌・円唇・半広母音[ɔ]との区別が難しい場合がある。また、一部の語彙は/o/を[ow]と発音することがある。  
/zɔ<sup>55</sup>ei<sup>55</sup>/[zɔ<sup>55</sup>ei<sup>55</sup>]「右」、/kho<sup>21</sup>/[kʰɔ<sup>21</sup>]「6」、/mo<sup>55</sup>/[mo<sup>55</sup>]「見る」

### 4.1.2 緊喉母音

緊喉母音を発音する場合、舌位は軟口蓋あるいは咽頭の位置に向かっていく。音声実現は通常の母音より舌位が低く、つまり下寄りで発音される。IPA では下寄りの補助記号“˘”で示すべきであるが、全ての緊喉母音はその特徴を持つため、本稿ではこれ以降“˘”を省略する。緊喉母音は補助記号“˘”で示す。

緊喉母音は日常会話で頻繁に生起せず、僅かな語彙にのみ現れる。

それでは以下に、緊喉母音のそれぞれの例を見ていく。

#### [前舌母音]

/i/ /si<sup>21</sup>/[sɪ<sup>21</sup>]「渴く」、/a<sup>55</sup>vi<sup>21</sup>/[ɐ<sup>55</sup>vi<sup>21</sup>]「豚」、bi<sup>21</sup>/[bi<sup>21</sup>]「言う」  
/e/ /e/は[e̞]と発音されることがある。  
/lɛ<sup>21</sup>/[lɛ<sup>21</sup>]「舐める」、/xɛ<sup>21</sup>oŋ<sup>33</sup>/[xɛ<sup>21</sup>oŋ<sup>33</sup>]「腸」、/xɛ<sup>21</sup>/[xɛ<sup>21</sup>]「八」

#### [中舌母音]

/ə/ /o<sup>33</sup>xə<sup>21</sup>/[o<sup>33</sup>xɐ<sup>21</sup>]「新しい」、/bə<sup>33</sup>/[bɐ<sup>33</sup>]「発芽する」  
/a/ /və<sup>33</sup>tu<sup>33</sup>/[vɐ<sup>33</sup>tɯ<sup>33</sup>]「ペン」、/tsi<sup>21</sup>tə<sup>33</sup>/[tsɪ<sup>21</sup>tɐ<sup>33</sup>]「ハサミ」、/dɑ<sup>21</sup>/[dɐ<sup>21</sup>]「切る」

#### [後舌母音]

/u/ /u<sup>33</sup>tu<sup>33</sup>ly<sup>21</sup>/[u<sup>33</sup>tɯ<sup>33</sup>ly<sup>21</sup>]「ミル」

/ɔ/ /gɔ<sup>21</sup>/[gɔ<sup>22</sup>]「怖がる」、/a<sup>55</sup>nɔ<sup>33</sup>/[ɐ<sup>55</sup>nɔ<sup>44</sup>]「豆」、/dzɔ<sup>21</sup>/[dzɔ<sup>22</sup>]「腰」

## 4.2 二重母音

二重母音は7種類が存在する。二重母音は上昇二重母音、下降二重母音のいずれも存在する。以下のようにまとめられる。

a. 上昇二重母音: ia, ie, iu, ua, ui

b. 下降二重母音: ao, ai

### 4.2.1 上昇二重母音

ほぼ漢語からの借用語と考えてもよいが、固有語も存在する。

/ia/ /ze<sup>21</sup>me<sup>21</sup>teia<sup>21</sup>/[ze<sup>21</sup>me<sup>21</sup>teie<sup>21</sup>]「嫁に出す」<CH.jià、/fia<sup>33</sup>tei<sup>33</sup>/[fie<sup>33</sup>tei<sup>33</sup>]「失う」

/ie/ /teie<sup>33</sup>xun<sup>33</sup>/[teie<sup>33</sup>xun<sup>33</sup>]「結婚する」<CH.jiéhūn、/dɔ<sup>21</sup>tie<sup>21</sup>/[dɔ<sup>22</sup>tie<sup>21</sup>]「出る」

/iu/ /liu<sup>21</sup>tshui<sup>21</sup>tsi<sup>33</sup>/[liu<sup>21</sup>tshui<sup>21</sup>tsɿ<sup>33</sup>]「拳」、/a<sup>21</sup>teiu<sup>55</sup>/[ɐ<sup>21</sup>teiu<sup>55</sup>]「おじさん」<CH.jiù

/ua/ /ey<sup>21</sup>ɕua<sup>21</sup>/[ey<sup>21</sup>ɕue<sup>21</sup>]「歯を磨く」<CH.shuā

/ui/ /thui<sup>33</sup>pɔ<sup>33</sup>/[thuei<sup>33</sup>pɔ<sup>33</sup>]「かんな」

/vu<sup>55</sup>pə<sup>21</sup>ta<sup>55</sup>thui<sup>33</sup>/[vy<sup>55</sup>pə<sup>21</sup>te<sup>55</sup>thui<sup>33</sup>]「太腿」<CH.dàtuǐ

### 4.2.2 下降二重母音

ほぼ漢語からの借用語と考えてもよいが、固有語が極わずかに存在する。

/ao/ /tshu<sup>55</sup>sao<sup>33</sup>/[tshu<sup>55</sup>səu<sup>33</sup>]「三人」、/tshao<sup>33</sup>ʂan<sup>33</sup>/[tshəu<sup>33</sup>ʂən<sup>33</sup>]「寺の祭り」

/zu<sup>21</sup>phao<sup>33</sup>/[zu<sup>21</sup>pəu<sup>33</sup>]「しゅうと」<CH.pó

/ai/ /wai<sup>55</sup>ti<sup>55</sup>/[wei<sup>55</sup>ti<sup>55</sup>]「地元以外」<CH.wàidì

/tshə<sup>21</sup>tsi<sup>21</sup>khai<sup>21</sup>/[tshə<sup>21</sup>tsɿ<sup>21</sup>khei<sup>21</sup>]「運転する」<CH.chēzi+kāi

## 4.3 三重母音

三重母音/iao/と/uai/の二種類を認める。漢語からの借用語でのみ現れる。それゆえに現在の資料中に/iao/は硬口蓋あるいは歯茎硬口蓋のみと共起し、/uai/は頭子音/k-/とのみ結合しうる。/uai/の例は極めて少ない。

/iao/ /vu<sup>55</sup>bə<sup>21</sup>eiao<sup>55</sup>thui<sup>33</sup>/[vy<sup>55</sup>bə<sup>21</sup>eiəu<sup>55</sup>thui<sup>33</sup>]「下腿」<CH.xiǎotuǐ

/eiao<sup>21</sup>tshai<sup>55</sup>tshi<sup>21</sup>/[eiəu<sup>21</sup>tsʰei<sup>55</sup>tsʰɿ<sup>21</sup>]「野菜を洗う」<CH.xiǎocài

/tehiao<sup>33</sup>pan<sup>33</sup>ti<sup>21</sup>/[te<sup>h</sup>iəu<sup>33</sup>pən<sup>33</sup>ti<sup>21</sup>]「大橋」<CH.qiáo

/uai/ /liu<sup>21</sup>kuai<sup>21</sup>tsi<sup>33</sup>/[liu<sup>21</sup>kuəi<sup>21</sup>tsɿ<sup>33</sup>]「肘」<CH.guǎi

## 5 T/声調

### 5.1 声調素

ラロ語には 55,33,21 の 3 種類の声調素が認められる。以下に音節単位で見られる声調素において声調の特徴を説明し、それぞれの例を掲げる。

**/55/(高平調 H):** 声調実現[55]、高く平らに発音する。本論文で用いる語彙データ(1,100 語彙程度)では高平調の出現率は約 26.3%である。そのうち、高平調は 56%以上語頭の位置に現れる。また、母音が緊喉母音である場合、高平調が出現しない。

**/33/(中平調 M):** 声調実現[33~44]、低く平らに発音する。筆者収集の語彙表では約 35.3%は中平調として出現している。

**異調値[44]:** 緊喉母音が中平調に現れる時、音声的にやや高く発音される傾向にあるが、高平調ほどの高さではない。

**/21/(低下降調 F):** 声調実現[21~22]、中平調よりやや低めのピッチから始まり、さらに緩やかに下降して発音される。筆者収集の語彙表では約 38.4%は低下降調として出現している。出現頻度が最も高い声調である。

**異調値[22]:** 緊喉母音が低下降調に現れる場合、調値は非緊喉母音の低下降調よりやや高く平らに発音される。しかし、調値は中平調より低く、低下降調より高い。

以下にそれぞれの声調素の例をあげておく。

**/55/** /kha<sup>55</sup>/[k<sup>h</sup>ə<sup>55</sup>]「糸」、/a<sup>55</sup>tei<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>tei<sup>21</sup>]「家畜」、/tei<sup>55</sup>/[tei<sup>55</sup>]「星」

**/33/** /phi<sup>33</sup>/[p<sup>hi</sup>33]「斗」、/ho<sup>33</sup>/[hō<sup>33</sup>]「うじ」、/sə<sup>33</sup>/[sə<sup>33</sup>]「三」  
/va<sup>33</sup>tu<sup>33</sup>/[və<sup>44</sup>tu<sup>33</sup>]「ペン」、/tsi<sup>21</sup>ta<sup>33</sup>/[tsɿ<sup>22</sup>tə<sup>44</sup>]「ハサミ」

**/21/** /va<sup>21</sup>/[və<sup>21</sup>]「雪」、/lu<sup>21</sup>/[lu<sup>21</sup>]「龍」、/xa<sup>21</sup>/[xa<sup>21</sup>]「肉」  
/da<sup>21</sup>/[dɛ<sup>22</sup>]「切る」、/a<sup>55</sup>mq<sup>21</sup>/[e<sup>55</sup>mq<sup>22</sup>]「猿」

## 5.2 声調交替

5.1 節にてラロ語の声調素は三種類があると述べた。しかし、認められた声調素が全ての語彙もしくは自然発話の内部に現れるわけではない。語形成により、声調交替が見られることがある。本稿では音韻的な声調交替(Phonological Tone Alternation)と文法範疇における特定の声調交替(Grammatical Tone Alternation)の 2 種類に分けて記述していく。

なお、本稿は名詞における声調交替に限定して記述を行う。

### 5.2.1 音韻的な声調交替

音韻的な声調交替は音韻的な動機付けによって声調素間で生じた交替現象である。単音節間における声調交替及び 2 音節以上の音節間における声調交替を記述する。この声調交替のパターンは意味の区別を持たない。

以下、声調の交替が起こった四つのパターンを見ていく。例としては(7)~(10)を見られたい。

## ■ 単音節における交替

パターン 1: 33+55→33+33

(7) a. me<sup>33</sup>+yə<sup>55</sup>→me<sup>33</sup>yə<sup>33</sup>

目 水 涙

b. tʃhi<sup>33</sup>+ma<sup>55</sup>→tʃhi<sup>33</sup>+ma<sup>33</sup>

一 CLF 一つ

## ■ 2音節以上における交替

パターン 2: 55+33+33→33+33+33

(8) a<sup>55</sup>zi<sup>33</sup>+ho<sup>33</sup>→a<sup>33</sup>zi<sup>33</sup>ho<sup>33</sup>

鶏 養う 鶏を養う

パターン 3: 55+21+21→33+21+21

(9) khu<sup>55</sup>dzi<sup>21</sup>+pe<sup>21</sup>→khu<sup>33</sup>dzi<sup>21</sup>pe<sup>21</sup>

山 登る 山を登る

パターン 4: 33+33+21→21+21+21

(10) vu<sup>33</sup>tsi<sup>33</sup>+kho<sup>21</sup>→vu<sup>21</sup>tsi<sup>21</sup>kho<sup>21</sup>

帽子 かぶる 帽子をかぶる

上記に音韻的な4つの声調交替パターンを挙げた。パターン1は単音節において、中平調と高平調を共起すると高平調は中平調に交替する。(7a)単独のyə<sup>55</sup>(水)は高平調で示しているが、語彙me<sup>33</sup>yə<sup>33</sup>(涙)においてはyə<sup>55</sup>の声調は高平調から中平調に交替した。(7b)の類別詞の声調は(7a)と同じ声調交替が起こった。

2音節以上の声調交替のパターンはやや複雑である。パターン2では初頭する声調は高平調かつ後続する声調は中平調である場合、初頭の高平調は中平調に交替する(例8)。パターン3では初頭する声調は中平調かつ後続する声調は低下降調である場合、初頭の高平調は低下降調に交替する(例9)。パターン4では一番目と二番目の声調は中平調かつ三番目の声調は低下降調である場合、声調は低下降調に交替する(例10)。

ただし、単音節を除き、2音節以上の声調の交替は恣意的な規則であると考えられる。声調における交替は不安定であり、類似した語形成においても、声調交替の現象が異なる。声調交替が実現するかどうかにかかわらず、意味が変わることはほぼ見られない。いずれにせよ、これらは音声的なレベルの現象だと位置付けられる。

## 5.2.2 文法範疇における声調交替

### 5.2.2.1 名詞に見られるパターン

#### ■ 人称代名詞に見られるパターン

人称代名詞において、所有関係を表示する際、所有格<sup>7</sup>は基本的に所有標識-yə<sup>21</sup>が付く形式で現れる。しかし、一人称の単数(nə<sup>55</sup>)及び二人称の単数(nə<sup>55</sup>)は特殊な

<sup>7</sup> 人称代名詞の所有格に後続する名詞が譲渡可能名詞であれば、所有標識-yə<sup>21</sup>は義務的に生起しなければならない。後続する名詞が譲渡不可能名詞(身体部位・親族など)であれば、所有標識-yə<sup>21</sup>は生起しなくても良い(例えば(11c))。

所有格の形式を持つ。一人称の所有格は  $\eta e^{33}y\text{ə}^{21}$  及び  $\eta o^{33}$  の形式を持ち、二人称単数は  $ni^{33}y\text{ə}^{21}$  である。一人称単数の所有格は  $\eta e^{33}$  で表現することが多い。

すなわち、一人称単数と二人称単数の所有格は声調交替と母音交替を行う。声調は高平調から中平調に交替する。一人称の母音 a は e もしくは o に交替し、二人称の母音 ə は i に交替する。例(11)で挙げよう。

(11) a.  $\eta a^{55}$        $\eta e^{33}-y\text{ə}^{21}$        $pho^{55}tshi^{33}$        $zi^{33}$ .  
 1SG.NOM 1SG-POSS      服      着る  
 「私は自分の服を着る。」

b.  $ni^{33}-y\text{ə}^{21}$        $thiu^{33}p\text{ən}^{33}$        $xi^{55}-ku^{33}$        $tei^{21}$ .  
 2SG-POSS      本      家-LOC      ASP  
 「あなたの本は家にある。」

c.  $\eta a^{55}$        $ea^{21}na^{21}-dzi^{21}ti^{21}$        $\eta o^{33}-ti^{21}$        $a^{33}n\text{ə}^{21}-ba^{21}-pa^{21}-ma^{21}$ .  
 1SG      とても-嬉しい      1SG-父      鳥-狩る-人-NEG  
 「父が猟師でなくて本当によかったです。」

(11a)では一人称単数の所有格  $\eta e^{33}-y\text{ə}^{21}$  が後続名詞  $pho^{55}tshi^{33}$  「服」を、(11b)では二人称単数の所有格  $ni^{33}-y\text{ə}^{21}$  が後続名詞  $xi^{55}$  「家」を修飾している。(11c)の一人称単数の所有格  $\eta o^{33}$  は後続名詞  $ti^{21}$  「父」を修飾している。(11c)の  $\eta o^{33}$  は一人称単数所有格の一種と考えられる。

### ■ 数詞に見られるパターン

数詞は単独で発音するとき、1~4 は中平調(33)で読まれ、5~9 は低下降調(21)で読まれ、10 は高平調(55)で読まれる。10 以上の数詞は漢語からの借用語で示す。固有語の数字は例(12)で挙げている。

(12)  $t\text{ʃ}hi^{33}$  「1」、 $n\text{ə}^{33}$  「2」、 $s\text{ə}^{33}$  「3」、 $zi^{33}$  「4」、 $\eta a^{21}$  「5」、 $kho^{21}$  「6」、 $x\text{ə}^{21}$  「7」、 $x\text{e}^{21}$  「8」、 $ku^{21}$  「9」、 $t\text{e}hi^{55}$  「10」

ただし、人数を数える場合と子供の生まれた順番を表現する場合、声調交替が起こる。

まず人数を数える場合を見ていく。人数を数える場合、基本的に「数詞+類別詞」の形で現れるべきであるが、数字と類別詞を融合して、別の新たな形態が用いられる場合がある。以下それぞれ表 3.1 で示す。

表 3.1: 人数を数える場合と基数詞の対照

人数	基数詞	人数	基数詞
tɕə <sup>55</sup> tɕha <sup>33</sup> 「1人」	tɕhi <sup>33</sup> 「1」	khou <sup>33</sup> 「6人」	kho <sup>21</sup> 「6」
ni <sup>33</sup> niao <sup>21</sup> 「2人」	nə <sup>33</sup> 「2」	xə <sup>33</sup> ou <sup>33</sup> 「7人」	xə <sup>21</sup> 「7」
sao <sup>33</sup> 「3人」	sə <sup>33</sup> 「3」	xi <sup>33</sup> ao <sup>33</sup> 「8人」	xɛ <sup>21</sup> 「8」
zou <sup>33</sup> 「4人」	zi <sup>33</sup> 「4」	ku <sup>33</sup> ao <sup>33</sup> 「9人」	ku <sup>21</sup> 「9」
ŋou <sup>33</sup> 「5人」	ŋa <sup>21</sup> 「5」	tɕhi <sup>33</sup> ao <sup>33</sup> /tɕhiao <sup>53</sup> 「10人」	tɕhi <sup>55</sup> 「10」

表 3.1 は人数を数える形式と基数詞をそれぞれに対照的に示している。表 3.1 一番左側の欄と第 3 番目の欄は人数を数える形式であり、第 2 番目と第 4 番目の欄は数字の形式を示している。

人数を数える場合は数詞と類別詞において形式が融合している。1 人と 2 人を除き、5 人～10 人の声調は単独の 21 調ではなく、中平調(33)と交替している。10 人は 33 調及び 53 調で発音してもよい。ただし、53 調は基本声調素ではなく、文法的な声調だと考えられる。

1 人と 2 人は特殊な表現を用いる。1 人の語形成は指示詞(tɕə<sup>55</sup>「この」)+類別詞(tɕha<sup>33</sup>)からなり、「この人」の意味となる。2 人は人称代名詞の双数からなると考えられる。ラロ語の双数は基本的に単数(一人称を除き)の直後に-ni<sup>33</sup>niao<sup>21</sup>に付いた形式で示す。

一人称の双数は un<sup>33</sup>niao<sup>21</sup> (2 人とも)の形式を用いて、二人称の双数は ŋ<sup>33</sup>tsə<sup>33</sup>ni<sup>33</sup>niao<sup>21</sup>(君たち 2 人)であり、三人称の双数は u<sup>33</sup>tsə<sup>33</sup>ni<sup>33</sup>niao<sup>21</sup>(彼ら 2 人)で示している。そのため、2 人を数える場合、人称代名詞の双数で表現しているのではないかと考えられる。

次に子供の生まれた順番による声調交替を見ておこう。表 3.2 を見られたい。

表 3.2: 子供の生まれた順番

男		女	
a <sup>55</sup> vu <sup>55</sup> 「長男」	a <sup>55</sup> lu <sup>33</sup> 「六男」	a <sup>55</sup> me <sup>33</sup> 「長女」	a <sup>55</sup> lu <sup>33</sup> 「六女」
a <sup>55</sup> ni <sup>55</sup> 「次男」	a <sup>55</sup> tɕhi <sup>55</sup> 「七男」	a <sup>55</sup> ni <sup>33</sup> 「次女」	a <sup>55</sup> tɕhi <sup>33</sup> 「七女」
a <sup>55</sup> san <sup>33</sup> 「三男」	a <sup>35</sup> pa <sup>21</sup> 「八男」	a <sup>55</sup> sa <sup>33</sup> 「三女」	a <sup>55</sup> pa <sup>21</sup> 「八女」
a <sup>55</sup> si <sup>33</sup> 「四男」	a <sup>35</sup> tɕiu <sup>55</sup> 「九男」	a <sup>55</sup> si <sup>33</sup> 「四女」	a <sup>55</sup> tɕiu <sup>55</sup> 「九女」
a <sup>55</sup> wu <sup>33</sup> 「五男」	a <sup>55</sup> ɕi <sup>55</sup> 「十男」	a <sup>55</sup> wu <sup>33</sup> 「五女」	a <sup>55</sup> ɕi <sup>55</sup> 「十女」

子供の順番においては、男女の順番の区別は声調の違いで区別する(表 3.2 の右側)。基本的な構造は「接頭辞 a+数詞」である。3 番目から 10 番目の数詞は漢語の借用語を用いる。4、5、6、10 番目において男女の区別がない。それを除き、他の男女の順番は声調で使い分けることが多く見られる。

a<sup>55</sup>vu<sup>55</sup>「長男」と a<sup>55</sup>me<sup>33</sup>「長女」は他の順番と異なり、声調で区別するのではなく、形態素で区別する。2、7、8、9 番目の男女は声調の違いで区別される。2、



7 番目の男の声調パターンは 55-55 であり、女の声調は 55-33 である。8 番目の男の声調パターンは 35-21 であり、女の声調は 55-21 である。9 番目の男の声調パターンは 35-55 であるが、女の声調は 55-55 である。

■ 指示詞に見られるパターン

ラロ語の指示詞は近称・遠称の使い分けがある。基本的に近称は *tʂ-*、遠称は *n-* を頭子音に持つ。

表 4 はラロ語の指示詞の一覧である。

表 4: ラロ語の指示詞の一覧

近称	遠称	グロス
tʂə <sup>55</sup> (NUM)(CLF)	na <sup>55</sup> (NUM)(CLF)	これ/あれ
tʂi <sup>55</sup> ta <sup>33</sup> ku <sup>33</sup>	ni <sup>55</sup> ta <sup>33</sup> ku <sup>33</sup>	こちら/あそこ
tʂi <sup>55</sup> ku <sup>33</sup>	ni <sup>55</sup> ku <sup>33</sup>	これら/あれら
tʂi <sup>55</sup> thə <sup>33</sup>	ni <sup>55</sup> thə <sup>33</sup>	これら側/あれら側
e <sup>21</sup> tʂi <sup>55</sup> thə <sup>33</sup>	e <sup>21</sup> ku <sup>21</sup> si <sup>21</sup>	どの辺/どこ

指示詞は斜格形で生起する場合は声調交替し、主格形の高声調から中声調に交替することがある。以下、それぞれの主格形と斜格形の例を挙げていく。

- (13) a. tʂə<sup>55</sup>      a<sup>55</sup>tʂa<sup>55</sup>tʂho<sup>33</sup>      ŋa<sup>33</sup>?      b. eo<sup>33</sup>sen<sup>33</sup>      tʂə<sup>55</sup>      sao<sup>33</sup>.  
 これ.NOM      何      COP      学生      この.NOM      3人  
 「これは何ですか?」      「この3人の学生」

- c. u<sup>33</sup>-tʂə<sup>33</sup>      ni<sup>33</sup>ta<sup>33</sup>ku<sup>33</sup>      ze<sup>33</sup>-pa<sup>33</sup>?  
 2-PL      あそこ.OBL      行く-FUT  
 「あなたたちはあそこに行きますか?」

- d. ŋ<sup>33</sup>-tʂə<sup>33</sup>      tʂi<sup>33</sup>ta<sup>33</sup>ku<sup>33</sup>      ku<sup>21</sup>tei<sup>21</sup>-xa<sup>21</sup>      dzə<sup>33</sup>-ma<sup>21</sup>-dzə<sup>33</sup>?  
 2-PL      こちら.OBL      野生-肉      食べる-NEG-食べる  
 「こちらでは野生の肉を食べますか?」

- e. tʂhu<sup>55</sup>      na<sup>55</sup>-tʂha<sup>33</sup>      a<sup>55</sup>sa<sup>33</sup>      ŋa<sup>33</sup>?  
 人      あの-CLF      誰      COP  
 「あの人は誰ですか?」

(13a)の指示詞は主語として表れ、主格形をとっている例である。(13b)は名詞を修飾し、主格形をとっている例である。(13c)と(13d)の指示詞は場所を表し、斜格

形で表れている例である。(13e)は名詞を修飾し、主格をとる例である。

概要をまとめると、近称において、主格形をとる場合は tʂa<sup>55</sup>を用いることが多く見られ(13a,b)、斜格形をとる場合は tʂi<sup>33</sup>を用いることが多い(13d)。声調はデフォルトの高声調から中声調に交替する。

遠称において、主格形は na<sup>55</sup>を用いることが多く見られ(13e)、斜格形をとる場合は ni<sup>33</sup>を用いることが多い(13c)。声調交替も現れ、近称と同じように高声調から中声調に交替する。

本節では人称代名詞、数詞、指示詞の声調交替の現象を見てきた。声調交替は声調素間の交替のみではなく、声調素ではない声調に変わるものもある。35 調や 53 調は形態音韻論的な影響により現れるようになったのではないかと考えられるが、今後の継続的な検討が必要である。

## おわりに

以上、雲南省保山市昌寧県の珠街彝族郷黒馬村の二布社で話されるラロ語の音韻特徴を中心に記述した。表 1 と表 2 の再掲となるが、現時点で収集されたデータによる音素体系としては表 4 のようにまとめられよう。

表 4: ラロ語の音素体系

[子音]

調音点 調音方法		両唇音	唇歯音	歯茎音	そり舌音	歯茎 硬口音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	無気	p b		t d			k g	
	有気	ph		th			kh	
鼻音		m		n			ŋ	
破擦音	無気			ts dz	tʂ dʂ	tɕ dɕ		
	有気			tsh	tʂh	tɕh		
摩擦音			f v	s z	ʃ ʒ	ɕ ʐ	x ɣ	h
接近音		(w)		l				

[単母音]	[声調]
非緊喉母音	55,33,21
i, y            u e    ə        o a	
緊喉母音	
ɨ                ʉ ɛ        ɛ̣        ɔ̣ ạ	

ただし、表 4 に掲げた分節音の音声特徴に関する注意点が挙げられる。

(14) a. 子音における相補分布が以下の条件で見られる。

/n/→[m]/\_[+bilabial], [ŋ]/\_[+velar], [ŋ]/elsewhere

/n/→[ŋ]/\_i, [n]/elsewhere

b. 子音における自由変異が以下の条件で見られる。

/z/は/-i/の前に置かれるとかなり弱く、[j]と[j̥]が自由に交替する。

c. 母音における相補分布が以下の条件で見られる。

/i/→[ɪ]/{ts,tsh,dz,s,z}\_; [ɪ]/{tʂ,tʂh,dzʂ,ʂ}\_; [i]/elsewhere

/a/→[ɑ]/{x,h}\_; [ɐ]/elsewhere

/u/→[ʏ]/{f,v}\_; [u]/elsewhere

今後は現地調査を継続して、可能な限り語彙データを収集するとともに、自然会話の例文やテキストの採集を進めることにより、さらに詳細な音韻分析の記述を目指す。また同時に形態論、統語論などの文法範疇における特徴について詳細な分析を進めたい。二布社に加えて、珠街の二布社以外の分析が実施されていない地域に関して、精力的な調査と記述を行っていききたい。

## 略号一覧

ASP:アスペクト	CH:漢語	CLF:類別詞	COP:コピュラ	FUT:未来
LOC:位格	NEG:否定	NUM:数詞	NOM:主格	OBL:斜格
POSS:所有格	PL:複数	SG:単数		

## 参考文献

### [中国語文献]

- 保山市民族宗教事務局 2006.《保山市少数民族志》昆明: 云南民族出版社
- 卜维美, 刘洪勇 2020. <腊罗彝语的分列式数量短语>《中国语文》第 5 期 609-640.
- 卜维美, 黄华德 2022. <腊罗彝语的新异范畴和示证范畴>《语言科学》第 3 期 264-275.
- 陈士林, 边任明, 李秀清 1985.《彝语简志》北京: 中央民族大学出版社
- 陈士林, 边任明, 李秀清 2009.《彝语简志》北京: 民族出版社
- 戴庆厦 1958. <谈谈松紧元音>《少数民族语文论集》第二辑: 35-48.
- 戴庆厦 1991.《藏缅语族语言研究》昆明:云南民族出版社
- 黄布凡, 戴庆厦 1992.《藏缅语族语言词汇》北京: 中央民族学院学报
- 李永周 2016.《昌宁腊罗巴传统民俗文化》昆明: 云南民族出版社
- 马学良 1948. <傩文“作祭献药供胜经”译注>《中央研究院理事语言研究所集刊》第二十辑: 577-666.
- 孙宏开, 胡增益, 黄行 2007.《中国的语言》北京:商务印书馆
- 王成有 2003.《彝语方言比较研究》成都: 四川民族出版社

云南彝语方言汇编(YNYF)1984.《云南彝语方言词语汇编》云南民族学院未出版  
云南省昌宁县志编纂委员会 1985.《昌宁县志》德宏: 德宏民族出版社  
中国社会科学院语言研究所方言研究室资料室 1981.〈方言调查词汇表〉《方言》第  
3 期  
朱文旭 2005.《彝语方言学》北京: 中央民族大学出版社  
周庭升 2017.《彝语腊罗话参考语法》中央民族大学博士学位论文

[日本語文献]

岩佐一枝 2019.「彝語の緊喉・非緊喉母音に関する覚書—音声分析の結果をもとに—」『音声研究』第 23 卷: 51-64

[欧米文献]

Björverud, Susanna. 1998. *A grammar of Lalo*. Lund: Department of East Asian Languages, Lund University.

Bradley, David. 1979. *Proto-Loloish*. London: Curzon Press.

Bradley, David. 2002. The subgrouping of Tibeto-Burman. *Medieval Tibeto-Burman Languages: proceedings of the Ninth Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, 73-112. Leiden: Brill.

Bradley, David. 2007. Language Endangerment in China and Mainland Southeast Asia. In *Matthias Brenzinger (ed.), Language Diversity Endangered*, 278–302. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Bu(卜), Weimei, 2018. The Equative Construction in Lalo Yi. In *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. 第 51 回国際漢藏語学会実行委員会・京都大学白眉センター.

Matisoff, James. A. 1975. Rhinoglottophilia: the mysterious connection between nasality and glottality. *Nasálfest (papers from a symposium on nasals and nasalization)*, ed. by Charles A. Ferguson, Larry M. Hyman, and John J. Ohala. A. Ferguson, LM Hyman, JJ Ohala. California, 265-287.

Moseley, Christopher (ed.). 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger (3rd edition)* Paris: UNESCO Publishing.

Yang, Cathryn. 2010. *Lalo regional varieties: Phylogeny, dialectometry, and sociolinguistics*. Melbourne: La Trobe University PhD dissertation.

Yang, Cathryn. 2015. *Lalo dialects across time and space: subgrouping, dialectometry, and intelligibility (Asia Pacific Linguistics: A-PL 22)*.

ウェブサイト

<http://www.yncn.gov.cn/info/3993/49918.htm> (最終閲覧日: 2023 年 2 月 21 日)

原稿受理日 2023 年 4 月 8 日